

日日研が求めているもの^[注1]

——日本語学と日本語教育をつなぐために

庵 功雄

◆要旨

本稿では、本研究会が求めている研究について論文名を挙げて説明した。具体的には、コーパスを用いて使用実態を調べる、学習者の誤用の背景を考える、その分野における研究上の「常識」を疑う、類似形式の違いに気づけるように周りの日本語に耳をすます、有標形式だけでなく無標形式にも目を向ける、観察されている事象の本質を考えるとといった観点から、日本語学と日本語教育をつなぐ研究が生まれる可能性があることを指摘した。さらに、「シャドーボクシング」のように、他人（または、他人に見立てた自分自身）に説明（しよう）することが自分自身の理解を深めるとともに、研究上の新たな発見につながる可能性を高めることを述べた。

◆キーワード

コーパス、負の転移、日本語教育文法、研究の常識、説明

◆ABSTRACT

In this paper, I explained, with some examples, researches needed in our journal, which will build a better bridge between the Japanese linguistics and the Japanese language teaching. They are classified as follows: researches investigating the actual frequency of grammatical items using corpus, ones explaining the cause of learners' mistakes, ones making a new finding by doubting "common knowledge" in the field, ones focusing on unnoticed differences between synonyms, ones considering unmarked forms as well as marked ones, ones trying to grasp the essentials of observed facts. It was also pointed out that in a process of explaining to others what one thinks (s)he "knows" one may reach a deeper understanding and make a new discovery.

◆KEY WORDS

corpus, negative transfer, pedagogical grammar of Japanese, common knowledge in research, explanation

What Kind of Researches are Needed in Our Journal?

For building a better bridge between the Japanese linguistics and the Japanese language teaching

ISAO IORI

1 はじめに

本研究会が発足したのは2009年で、それ以来、多くの方のご支援に支えられて、研究会誌『日本語／日本語教育研究』も今号で8号を刊行することができた。たいへんありがたいことである。

ただ、研究発表および投稿論文の件数の増加に反して、本研究会が発足当初以来求めてきたタイプの研究論文の数は必ずしも増えているとは言えない現状がある。本稿では、改めて本研究会が求めているタイプの論文を具体的に提示し、読者のみなさんの参考に供したいと思う。

本研究会のHPに本会の理念が次のように記されている。

(1) 日本語／日本語教育研究会は以下の三本柱を活動の理念としています。

1. 日本語教育貢献を明示的に打ち出した日本語学研究的活性化
2. 若手研究者（大学院生）・海外の研究者が発表できる場の創出
3. 研究会による大学院生の育成・研究指導

本稿では、上記1～3のうち、1を中心に述べていくことにする。その際、本研究会の主要構成メンバーである、日本語教師、非日本語母語話者の大学院生、モノリンガルの日本語母語話者の大学院生というカテゴリー別を含め、合計5つのタイプに分けて述べることにする。

2 日本語教師の方へ——「この形式は本当に使うかな？」

最初に紹介するのは、日本語教師の方に適したタイプの研究である。

日本語教師の特徴は、日々学習者と接していて、誤用例をはじめとする学習者のデータに日々接していることである。本節では、そうした日本語教師の方にとって取りかかりやすい論点として、「この文法項目は本当に使うだろうか」というものを取り上げ、その観点から書かれた論文を紹介する。

2.1 庵功雄 (1995) 「ガ～シタイとヲ～シタイ」『日本語教育』86

約20年前に書いた拙論である。当時は、「～シタイの前が他動詞のときは、ヲをガに変える」という規則が大部分の日本語の教科書に書かれていた。しかし、次のような例でヲをガに変えると非常に不自然に感じられる。逆に、ガをヲに変えると不自然になるという例はほとんど見かけなかった。

(2) 誕生日に限らず、できるだけ楽しい気分で毎日を(??が)過ごしたい。

(中村邦生『月の川を渡る』。BCCWJ。PB49_00257)

(3) お互いの気持ちを(??が)確かめたかっただけなんだ。

(五十嵐貴久『1985年の奇跡』。BCCWJ。LB9_00261)

この論文は、当時入手可能なコーパスを使って、この直感を検証したもので、調査の結果、「食べる、飲む」以外の全ての動詞で、ヲがガよりも圧倒的に多く使われており、ガの用例がある動詞はごく一部で大部分の動詞ではヲの用例しかないことがわかった。

2.2 庵功雄 (2009) 「推量の「でしょう」に関する一考察」『日本語教育』142

この拙論は、(4)のような非母語話者の会話や、(5)のようなゼミ生からもらったメールで気づいた誤用例をもとに論文化したものである。

(4) 教師：田中君、どこにいるか知らない？

学生：図書館??でしょう (okだと思います)。

(5) (奨学金免除の書類の締切を尋ねた筆者からのメールに対する返信)

締切は金曜日です。水曜日までにいただければいい??でしょう (okと思います)。

これらの例で、「でしょう」を使うと違和感を覚える。これは、野田尚史氏の言う「かちんとくる誤用」の例だと言える。一方、「と思います」なら問題はない。この論文では、このことの原因を、コーパス調査、教科書調査、文献

調査を経て論文化したが、調査の結果、「でしょう。」の用例数は極めて少なく天気予報以外ではほとんど使われないこと、教科書の用例がほとんど天候関係のものであることなどがわかった。

3 非日本語母語話者の方へ

——「この言い方は母語の影響なのでは？」

2つ目に紹介するのは、非日本語母語話者の方に適したタイプの研究である。

非日本語母語話者のバイリンガルは、日本語教師やモノリンガルの大学院生に比べて、(本人を含む)自分と同じ母語の学習者の誤用に接したとき、誤用の理由がわかりやすいという点で、大きなアドバンテージ(利点)を持っている。

白川(2002)は非日本語母語話者に見えている日本語を「ニホン語」と称し、日本語教育文法^[註2]の目的をニホン語の記述にあるとしているが、こうした研究において有利なのは明らかに非日本語母語話者である(庵2002, 2013, 2017)。本節では、そうしたタイプの研究を紹介する。

3.1 張麟声(2001)「私に対してはこれは簡単だよ」『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク

中国語を母語とする日本語学習者(中国語話者)に次のような誤用が見られることがある^[註3]。

- (6) まず、新生児が減って、子どもの数が減少することは子どもの健やかな成長??に対して(okにとって)大きな影響がある。
- (7) だから、一つ一つの国家は晩婚化の問題??に対して(okについて)、自分の国情に基づいて政策を採用したほうがいい。

張(2001)は中国語話者にこうした誤用が見られる原因を、中国語で「にとって」「について」に当たる語がともに「对于」であり(「について」は「关于」でも表せる)、「に対して」が「对」であることから、「对」という漢字が原因で負の転移が起きていると説明している^[註4]。

3.2 陳昭心(2009)「「ある/いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」『世界の日本語教育』19

結果残存(結果の状態)のテイル形は中国語話者にとって産出が難しく、中国語話者はテイル形の代わりにタ形を使うことが多いことは、第二言語習得の世界では広く知られている(張2001, 庵2010, 稲垣2013)。

- (8) (部屋に入って) あっ、窓ガラスが??割れた(ok割れている)。
- (9) (スカートを試着しようとしてファスナーの不具合に気づいたとき) すみません。ファスナーが#壊れました(ok壊れています)。(cf. 黄・井上2005)

しかし、中国語話者の誤用には次のようなものもある(陳2009)。

- (10) (家に帰ったとき母が言う) お帰り。お客さん??いる(ok来て(いる)よ)。
- (11) (路上で財布を発見して) あっ、財布が??ある(ok落ちて(いる)！)

陳(2009)はこれらの誤用を中国語の存在文の転移と考え、調査を行い、それを実証している。この論文は上述の「ニホン語(=学習者に見えている日本語)」の実態を明らかにしたものとしても高い価値を持っている。なお、これに似た現象はブラジル・ポルトガル語話者においても見られる(トッフォリ2017)。

4 大学院生の方へ——「研究の常識」を疑ってみよう

2節と3節では学習者のデータに接することから研究のヒントを得られる人に適したタイプの研究を紹介したが、本節では、日本語教育の実践の機会に乏しいモノリンガルの大学院生の方に適したタイプの研究を紹介する。

本節のテーマは「研究の常識」を疑うということである。

4.1 杉村泰 (2013) 「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について——人為的事態の場合」『日本語／日本語教育研究』4

開けにくいふたを開けることができたとき、日本語母語話者は (12) のように言うのに対し、中国語話者は (13) のように言う、ということはよく知られている (小林1996ほか)。

(12) あっ、開いた!

(13) あっ、?開けた/?開けられた!

こうした研究上の「常識」を知っておくことは (日本語教育に関しても) 重要だが、それだけでは新しい研究にはつながらない。こうした「常識」を将棋や囲碁では「定跡／定石」と言うが、将棋や囲碁のトップ棋士はこうした「常識」を知り、それを越えるものを作り出している。同じことが研究にも言える。

例えば、次のような場合、「常識」では自動詞が使われるはずだが、(14) のような自動詞は座りが悪く、(15) のような他動詞の方が適切である (杉村2013)。

(14) さあ、ケーキが?切れたから、食べよう。

(15) さあ、ケーキをok切ったから、食べよう。

杉村 (2013) は、こうした類例を作り、それについて、日本語母語話者と中国語話者にアンケート調査を行っている。その結果、両者の判断がほぼ一致するものもあれば、ずれる場合もあることがわかった。

この論文を書く上で、研究の「常識」を知っていることは必要だが、それを鵜呑みにせず、自分で考えて検証する姿勢を持つことがより重要なのである。

4.2 井本亮 (2015) 「連用修飾関係「大きくV」について」『日本語／日本語教育研究』6

日本語の副詞的連用成分の研究では、結果の様態を示す修飾が詳しく研究さ

れている。例えば、(16) は「風船が大きい」という風船の結果の様態を示している。これは、英語のSVOC文型 (生成文法で言うsmall clause) とも関係するという点で、研究者の興味を引いてきたと考えられる。

(16) 風船が大きく膨らんだ。(結果の副詞)

一方、(17) (18) のような「大きく」はこうした研究ではあまり取り上げられていない。これは、こうした用法は「大きく」固有の (idiosyncratic) 問題で「文法的」というより「語彙的」な問題と考えられているためかもしれない。

(17) このあたりの風景はこの10年で大きく変わった。(変化の差)

(18) ケーキを大きく切る。(分割変化の産物のサマ)

井本 (2015) は、「大きく」の用法のタイプごとに、学習者へのアンケート調査によって、学習者の理解度 (「大きく」の意味を正しく理解しているか) と難易度評価 (「大きく」の意味のわかりやすさについてどのように考えているか) を調べた。また、コーパスにおける「大きく」の用例調査を行った。調査の結果、(17) のような「変化の差」を表す用法や (18) のような「分割変化の産物のサマ」を表す用法はコーパスの用例が非常に多い一方、学習者の理解度が低いことがわかった。このことを踏まえ、井本 (2015) はこのタイプの「大きく」を積極的に教えていくべきであると結論づけている。

井本氏は連用修飾成分研究の第一人者だが、日本語教育の現場に身を置き、学習者にとってどのようなことが必要かということを考える中でこうした結論に至った。これは論者が考える日本語教育文法のあり方でもある。

5 みなさんへ——「この違いは何だろう?」について考えてみよう

本節では、全てのカテゴリーの大学院生、若手研究者のみなさんにとって可能なタイプの研究について取り上げる。

5.1 陳昭心 (2011) 「忘れた」と「忘れていた」の使い分けに関する指導上の留意点」『日本語／日本語教育研究』2

「忘れる」という動詞は使い方が難しい動詞である。例えば、中国語では(19)(20)が同形になるため、中国語話者にとって難しいと考えられる(ただし、この使い分けはかなり多くの言語の話者にとって難しいかもしれない)。

(19) (好きなテレビ番組の開始時間が近づいていることに気づいて)

忘れて (い) た / ?? 忘れた! (と急いで帰る)

(20) (宿題をカバンに入れていなかったことに学校で気づいて)

? 忘れて (い) た / 忘れた!

陳(2011)は、これらの用例を踏まえ、アンケート調査によって、台湾人中国語話者と日本語母語話者のズレを調べた上で、適切な指導を行うために必要な条件を考察している。

この論文の最大のポイントは(19)(20)のような例に気づくか否かであり、そのためには自分の周囲の日本語に常に耳をすましておくことが重要である。

5.2 阿部二郎 (2015) 「引用句内におけるコピュラの非出現について」『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版

(21)(22)のような例で、引用の「と」の前にコピュラが入るかは自由変異(free variation)のように見える。

(21) あの人(人)はアメリカ人 { ϕ / だ} と思う。

(22) この問題を解決するのは困難 { ϕ / だ} と思われる。

阿部(2015)はまず、このことをコーパスで検証した。その結果、「と思う」の前には「だ」が出る傾向が高いのに対し、「と思われる」の前には出ない割合が高いことがわかった。

阿部(2015)は、この結果を砂川(1987)の引用における「場の二重性」の議論を用いて説明している。典型的な引用文には、引用文にも引用文を含む文全

体にも発言の場が存在する(場の二重性)のに対し、「と見える」のように完全にモダリティ形式化したもの場合には引用文内には発言の場が存在しなくなる。「と思う」は場の二重性を保持しているため、引用文には判断が存在し、そのためにコピュラ(「だ」)が存在しないと舌足らずになるのに対し、「と思われる」は「と思う」と「と見える」の中間に位置するため、場の二重性がある解釈もない解釈も可能でありコピュラがある場合もない場合も許容されるということである。

この論文のポイントもまた、(21)(22)のような場合にコピュラが落ちるかどうかという現象に気づくことであるが、それに加えて、分布の偏りが出たときに、それを説明できる知識を持っていることが必要になるのである。

6 もう一步進んで考えてみよう

最後に、既存の知識をもう一步進めたところで、新しい観点が見えてくることを示す論を紹介する。

6.1 佐藤琢三 (2015) 「補助動詞テオク」『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版

「～ておく」の意味はかなり詳しく調べられており、「～てある」が準備をした結果、今準備ができていることを表すのに対し、「～ておく」は準備をすることに焦点があるといったことが指摘されている(庵・高梨・中西・山田2000)。

(23) 今日試験だけど、十分勉強 {してある / * しておく} から大丈夫だ。

(24) 今日試験だけど、十分勉強 {* してあった / しておいた} から大丈夫だ。

このように、「～ておく／～てある」のように有標の形で表現されているものについては、その意味を理解し、説明することはそれほど難しくないので普通であり、日本語教育の「説明」はそこで終わっているのが普通である。

しかし、「～ておく」の意味を「準備」と言うだけで十分かと言うとそうとは言えないことが次のような例からわかる。

(25) 夕食の支度をするために買い物を {した/しておいた}。

この例では「夕食支度をするために」と言っているので、「した」(無標形)を使っても「しておいた」(有標形)を使っても、「準備」の意味は伝わるはずである。では、何のために「～ておく」(有標形)を使うのだろうか。佐藤 (2015)はこの点を問題にしているわけだが、論文中にもあるように、これは、まさに「学習者にとっての問題」であり、学習者の目線から、すなわち、上述の「ニホン語」という目線からすれば、当然問題としなければならないものである。

佐藤 (2015) は「～ておく」のスキーマ的意味を「動作主が動詞の示す行為の結果や影響を意図してその行為を遂行したことを有標的に示す」ことと規定し、そうした表現が選択されやすい要因を4つ挙げて検討している。その過程で、母語話者に対するアンケートが用いられているが、これもコーパス一辺倒ではない論証の仕方として参考になる^[註5]。

6.2 佐藤琢三 (2017) 「知覚されていない〈過程〉とその言語化——「ある／いる」「している」「した」の選択可能性をめぐって」本号所収

最後に取り上げるのは、本号所収の佐藤氏の論文である。

この内容については、実際に読んでいただくのがよいと思われるので詳しくは述べないが、この論文は、3.2で取り上げた陳 (2009) やトッフオリ (2017) で観察されているのと同種の事象をきっかけに、その理由を考察したものと捉えることができるのではないと思われる。この位置づけが正しいとすれば、この論文は、4.1で取り上げた杉村 (2013) と類似した性格も持っていると言える。すなわち、「結果残存用法の一部は「存在」に近づく」という「常識」(まだ、必ずしもこのように理解されているとはいえないところもあるが)を疑い、そこからさらに一步踏み出したものと考えられるということである。

また、次の部分にも注目したい。これは、「先行研究で言及されているものの、その後の研究で活かされていない」観点を取り上げることであり、こうした観点を持つことで、研究上のbreakthroughが得られる可能性がある。

(26) ところで、寺村 (1984:136) は知覚されていない過程の読み込みという

点について、「いわゆる動作の継続 (つまり事象の始まりの結果の存在) の場合は、眼前の情景をそのまま写したものであるが、いわゆる結果の状態の場合は、眼前の状態を、ある過去の事件の結果であると解釈する思考が介在している。この型の表現が成立するためには、上のような解釈を誘発するような状況がなければならない。」(傍点は本稿の筆者) という示唆的な指摘をしている。本稿の議論は、まさに寺村のいう「解釈を誘発する状況」について考えたものである。

(佐藤2017:18)

7 おわりに

本稿では5つのタイプに分けて、「日日研が求めている研究」について記した。今回取り上げた現象は、日本語を教えたり、研究したりしている方にとってはなじみのあるものばかりだと思われる。そうしたなじみのある現象をいかに研究の場に持ってくるができるかが問題なのだが、そのことにつながる方策として、次のことを挙げたいと思う^[註6]。

(27) 常に「説明」を考える。

理解することは相対的に言えば簡単であるが、それを他人 (教師の場合は学生) に説明することは簡単ではない。自分が明日取り上げる文法項目、語彙項目その他について、「何を聞かれても大丈夫」という状態を作ることが大変であることを考えればこのことはご理解いただけるだろう。しかし、それを目指して「シャドーボクシング」を繰り返す中で、多くの気づきが得られるのである。

優れた芸人の最大の資質は、常に芸のことを考えられることだと言われている。酒井 (2006) の「運・鈍・根」というのも同じことを言っているのだと思われる (庵2013)。

研究のネタは至る所に転がっている。それを見つげられるか否かは、それを見つげるための努力を続けるか否かにかかっているのである。 <一橋大学>

注

- [注1] …… 本稿は、2016年10月2日に学習院女子大学で開催された第8回日本語／日本語教育研究会で行った同名の講演の内容を加筆修正したものである。
- [注2] …… 白川 (2002) では「日本語教育文法」という語は使われていないが、現在の用語法で言う日本語教育文法の内容を指していると思えることができる。
- [注3] …… (6) (7) はいずれも『JCK作文コーパス』の中国語話者によるものである (<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>)。
- [注4] …… 「について」を「に対して」と誤る誤用は韓国語を母語とする日本語学習者 (韓国語話者) にも見られる。これは、韓国語では「について」と「に対して」がともに「에 대해」になることに由来する負の転移と考えられる (庵 2017)。
・わたし、今になって思って、あーずいぶん、自分が悪い先生いい加減な先生だと思って、その時の仕事に対しては (??ついては) 恥ずかしい記憶しかないんですね。 (KY コーパスKS03)
- [注5] …… ただし、調査法については、稲垣 (2009) と同様に優先度タスク (preference task) を使って、「無標形の方がいい、有標形の方がいい、どちらも同じぐらいいい、どちらも同じぐらい悪い」という4者択一で調べるといった手法をとることも考えられる。
- [注6] …… 以下の内容について詳しくは、庵 (2017) を参照されたい。

参考文献

- 阿部二郎 (2015) 「引用句内におけるコピュラの非出現について」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 pp.57-78. くろしお出版
- 庵功雄 (1995) 「ガ～シタイとヲ～シタイ」『日本語教育』 86, pp.52-64.
- 庵功雄 (2002) 「書評 白川博之「外国人のための実用日本語文法」」『一橋大学留学生センター紀要』 5, pp.123-128. 一橋大学
- 庵功雄 (2009) 「推量の「でしょう」に関する一考察」『日本語教育』 142, pp.58-68.
- 庵功雄 (2010) 「アスペクトをめぐる」『中国語話者のための日本語教育研究』 創刊号, pp.41-48. 日中言語文化出版社
- 庵功雄 (2013) 『日本語教育・日本語学の「次の一手」』 くろしお出版
- 庵功雄 (2017) 『一歩進んだ日本語文法の教え方1』 くろしお出版
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 稲垣俊史 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者による目的を表す「ために」と「ように」の習得」『日本語教育』 142, pp.91-101.
- 稲垣俊史 (2013) 「テイルの二面性と中国語話者によるテイル習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』 4, pp.29-41. 日中言語文化出版社
- 井本亮 (2015) 「連用修飾関係「大きくV」について」『日本語／日本語教育研究』 6, pp.63-78.

- 黄麗華・井上優 (2005) 「対照研究と日本語教育」松岡弘・五味政信 (編) 『日本語教育の開かれた扉』 pp.122-136. スリーエーネットワーク
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現」『文藝・言語研究』 29, pp.41-56. 筑波大学
- 酒井邦嘉 (2006) 『科学者という仕事』中公新書
- 佐藤琢三 (2015) 「補助動詞テオク」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 pp.1-18. くろしお出版
- 佐藤琢三 (2017) 「知覚されていない〈過程〉とその言語化—「ある／いる」「している」「した」の選択可能性をめぐる」『日本語／日本語教育研究』 8, pp.5-20.
- 白川博之 (2002) 「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』 31(4), pp.54-59. 大修館書店
- 杉村泰 (2013) 「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について」『日本語／日本語教育研究』 4, pp.21-38.
- 砂川有里子 (1987) 「引用文の構造と機能」『文芸言語研究 言語篇』 13, pp.73-91. 筑波大学
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析』 スリーエーネットワーク
- 陳昭心 (2009) 「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」」『世界の日本語教育』 19, pp.1-15. 国際交流基金
- 陳昭心 (2011) 「「忘れた」と「忘れていた」の使い分けに関する指導上の留意点」『日本語／日本語教育研究』 2, pp.237-254.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- トッフォリ, ジュリア (2017) 「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向に関する一考察」2016年度一橋大学言語社会研究科修士論文

